

音楽の心地よさについての研究

日本大学生産工 ○岩瀬 かいや 山本壽夫

1.はじめに

音楽は人間の文化活動の中で西洋、東洋各国に様々な起源をもち、国境、言葉を越えたコミュニケーションの手段として、現在まで発展してきた。また近年では、音楽が人体に与える、精神的安定、リラックス効果についても研究され身体への良い影響が科学的に立証された音楽というものも出てきている。音楽に関する諸活動は、人類の発展とともに、欠かせないものとなってきた。本研究では、音の3要素といわれる高さ、大きさ、音色、音楽の3要素といわれるメロディ、ハーモニー、リズムに着目し、現在流行している近代音楽（国内、国外）と西洋のクラシック音楽と比較を行い、国境、時代を超えた音楽の心地よさについて、感性工学の知見を用い研究する。今後の音楽の発展への一つの指標となることを目的とし、研究をおこなう。なお、本研究における仮説検証は、ケーススタディ方式にておこなう。

2. 先行研究

先行研究として、次の項目に関する研究を前提とする。

①感性工学の基礎と現状

②フレーズに対する心地よさの客観評価法の性能評価

③体感音楽聴取方法の質的分析と量的分析による感性評価

上記①では、長沢仲也・清水義雄・長町三生・

森典彦・中森義輝：「シリーズ・感性工学をこう考える」、坂本埠：感性の哲学、篠原昭・清水義雄・坂本博編「感性工学への招待」長町三生：「感性工学—感性をデザインに活かすテクノロジー」、を示す事ができる。

上記②では、渡辺茂夫 1993「クラシック音楽による心と体の健康法—リズムと旋律の調和がストレス・イライラ・疲れを解消」を示す事が出来る。

上記③では小林進「感性工学の基礎—美とエントロピー」を示す事ができる。

3. 現状の分析

現状の分析として、音楽の歴史と近代音楽を調査することにより次の内容を示す事ができる

クラシックを音楽様式や時代でおおまかに分けると、以下の6つに分かれることが多い。

1：「中世」（6世紀頃～15世紀中頃）

2：「ルネサンス」（15世紀～17世紀中頃）

3：「バロック」（17世紀初頭～18世紀中頃）

4：「古典派」（18世紀中頃～19世紀初頭）

5：「ロマン派」（19世紀初頭～20世紀）

6：「近代」（1890年～1920年）

7：「現代」（1920年～）

1：最初は伴奏もなく、少しだけ節回しをして祈りの言葉を唱えるというだけのものだった。しかし、そのうちに旋律（メロディ）が加わり、単旋律が複数の旋律を持つもの（多声音楽＝ポリフォニー）に変わって、音の重なりが生まれることでハーモニーが生

Research on the comfort of music

Kaiya IWASE, Hisao YAMAMOTO

まれ、音楽的に豊かな聖歌が誕生してきた。

2：合唱音楽を中心に声楽が栄え、ミサ曲などの教会音楽やシャンソンなどの世俗曲が多く作られた。

3：ヴァイオリンやピアノなど、現在のクラシック音楽の中心を担う楽器が進歩し、器楽音楽が本格的に発展してきた。

4：バロック以前に主流だった、「多声音楽」がなくなり「和声音楽」が主流となる。また、展開や結びなど、それぞれに構成上の明確な役割を持たせた4つの章から構成される「ソナタ形式」が確立された。

5：感受性や主観に重きを置く考え方（ロマン主義）が生まれた。

6：ロマン派のような激しい主観表現を避け、気分や雰囲気を変えさせる「印象主義」が台頭した

7：この時代は現代アートの芸術家たちが自由な発想で、まったく新しいアートを作り上げるように、非常に独創的な音楽が現在も生まれている。

これらの音楽と、近代音楽を比較検討する。